

紅花生産と文化交流

紅花のまち河北町

町が、紅花を町の花と定め「べに花の里・かほく」を標榜している理由は、江戸中期以降にみられる最上紅花の集散がこの町でおこなわれたことによります。

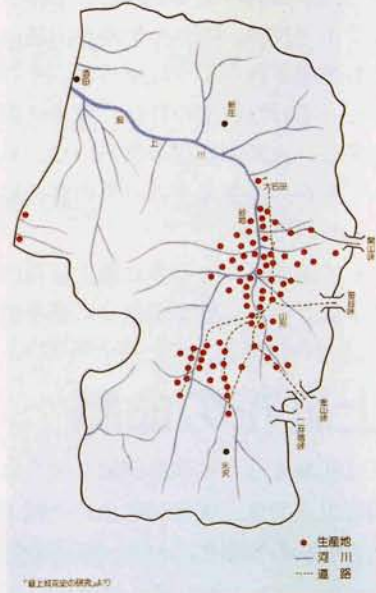
町には、天正年間(1573～92)の紅の生産を物語る資料が残っており、江戸時代も寛政年間(1789～1801)ごろから安政年間(1854～60)あたりまでは、いわゆる最上千駄の時代で、全国生産の50%をこの村山地方で生産していました。

紅花は中国から渡来し、次第に雪深い東北地方等でも栽培されるようになりました。このように、紅花は岩手県以南の日本全国で栽培されたこととなりますが、特にこの村山盆地周辺が全国生産の半数を占めるようになったのは、土地が紅花栽培に適しており、換金作物として重宝されたためといわれています。

この町に最盛期には20軒に及ぶ紅花荷主問屋があり、更に仲買人の花買仲間の目早やサンベと呼ばれる人達が25人から30人を数え、山形市につぐ紅花の一大集散地でありました。

紅花の生産〈江戸時代〉

畑の面積……約1,200ha
生産高……約120,000kg



紅花交易

このようにして生産された紅花は、京都や大阪へ移出されました。寛文年間(1661～73)幕府の命を受けた河村瑞賢の差配などもあって、江戸・大阪への物資の輸送が最上川を利用した酒田出しになると、産物の流れがおのずと関西方面に移り、京都・大阪には近江商人や伊勢商人が定住し、最上の商人たちも最上店や谷地店と呼ばれるいわば出張店を持つようになりました。当地方の物産である米・紅花・大豆・青芋・漆・まわた・油などを移出した、その返り荷として、関西方面から呉服地・繰り綿・瀬戸物・塩・砂糖・小間物等が運び込まれました。

特に調度品・絵画・書籍・京人形などの美術工芸品が数多く移入され、現在貴重な文化財として町内に数多く保存されています。



紅花を見守る紅花地蔵

ここは蔵王連峰をのぞむ上山城下。二日町というところに、高さ50センチほどの小さな地蔵様がありました。紅花の季節になるときまって近郷近在から大勢の参詣人がやってきて、お札をいただいでいきます。紅花畑にこのお札を立てておくと、茎が折れる病気から紅花を守ってくれるというのです。人々はこの地蔵様を紅花地蔵とよんで大切に祀り、紅花のすこやかな成育を祈り、あわせて五穀の豊饒を願ったのでした。

(殖産銀行発行「紅花」より引用)



冠位十二階制の色彩

冠位十二階の制度は、推古天皇11年(603)12月に聖徳太子が創案したものといわれます。

この制度は、色の異なる冠を用い、朝廷における席次を定める制度です。その順次を十二階にわけ、名称は、大小の徳・仁・礼・信・義・智でこれにそれぞれ紫・青・赤・黄・白・黒に染めた冠をあてています。

(ものと人間の文化史、「色」より)

紅花大尽と文化の道

紅花大尽といわれた尾花沢の豪商鈴木八右衛門には、次のようなエピソードがあります。

江戸時代の元禄頃のこと、最上の豪商が紅花の荷を江戸に送り出しました。ところが、江戸の商人たちの不買同盟にあい、荷は宙に浮いてしまいました。そのとき彼は、それではと品川の浜でその荷を焼いてしまったのです。(実は紅殻を塗りこんだ古綿荷か鮑屑のようなものだったのです。)それが知れわたるとたちまち紅花の値はハネあがり、それをまって本物の紅花を売って大金を手に入れた彼は、かの吉原の大門を閉めきって豪遊したのです。噂は江戸の巷に流れ、さすがの江戸っ子も紅花商人のきつぷのよさに舌を巻き、吉原では「最上衆なら粗末にならぬ、敷いて寝るよな札くれる」などと唄われたともいいます。

紅花商人に対する金融・商社的な役割を果たして産をなした尾花沢の豪商鈴木八右衛門を人よんで紅花大尽といいます。もちろん、この話は伝説です。最上紅花は主として京・大阪に積み出されていたもので、江戸にはそれだけ大量のものが送られてはいなかったとするのが通説です。けれど、紅花商いによる最上商人の繁盛ぶりはよく伝えられています。

江戸で名をあげた鈴木八右衛門は、清風と号して俳諧に親しんだ人でもあり、俳聖芭蕉とも交流がありました。芭蕉は奥の細道の途中、尾花沢の清風のもとに十日間も滞在し、句会を開いたり、山寺に遊んだりしています。今、尾花沢市の芭蕉・清風歴史記念館には当時の資料が保存されていますが、多くの紅花商人が同じように上方文化や江戸文化をふるさとに持ちこみました。紅花流通の道は、いわば《文化の道》でもあったのです。

(殖産銀行発行「紅花」より引用)

紅のことわざ

◆紅は園生そのうに植えても隠れなし

(大成する人物は子どもの時から常人と違って優れた素質が認められるの意)

◆柳は緑 花は紅

(天地自然のあるがままで、人工の加わらぬさま)

◆万緑ばんりよく叢中そうちゆう 紅一点

(多くの男性の中にただ一人女性がまじっているたとえ)

◆葉九層倍 花八層倍

(売値が原価にくらべて非常に高いこと)

◆尼御前の紅

(不似合いなことのたとえ)

◆あかがり足もみうらに紅絹裏

(紅絹裏をちらつかせて歩く女性の素足にあかぎれが切れていること 不似合いで艶消しな取り合わせをいう)

◆江戸の紅絹裏 難波の紫 都きむくの黄無垢

(それぞれの地では流行おくれの衣服とされたところから、古びて流行おくれのものとのたとえ)

◆江戸紫かのこに京鹿子

(紅染は京都の名産、紫は江戸の銘物である 江戸時代の東西両都の染色の特徴をいうことば)

◆紅は染むるくれないに色を増す

(紅の染色は、最初は色薄く何回も繰りかえし染めて濃くすることから繰りかえし努力することが大切であるということ)

◆女かたんは華丹ようちゆうの窈窕を乱すをにくむ

(華丹はおしろいや紅の意、お化粧も過ぎると逆効果になる)

◆人に千日の好無く 花に百日の紅無し

(人の親しい交際も花の盛りと同様に長続きしないものだ)

◆宝剣は烈士に贈り 紅粉は佳人に贈る

(宝として大切にしている剣は勇士に贈り、紅とおしろいは美人に贈る 物を贈るに当を得ていることのたとえ)

◆紅葉もみじに置けば紅の露

(環境によって外観の変わることのたとえ)

◆木綿布子もみに紅絹の裏

(粗末な木綿の綿入れに豪華な紅染の絹をつけること 釣り合わないことのたとえ また外見より内実がすぐれていることのたとえ)

◆寒中の丑の日に買った紅は葉になる

(寒中に作られた紅は品質がよいうえ口中の荒れを防ぐ 丑の日に買うと小児の疱瘡に薬効があるという)

◆売り物に紅をさせ (花を飾れ)

(売る品物は美しく見せよ)

◆^{べにおしろい}紅白粉は女のたしなみ

(紅や白粉で化粧することは女として大切な心がけの一つである)

◆誰に見しよとて^{べにかお}紅鉄漿つける みんな主への心中立て

(誰に見せるために化粧するものでもありません それは皆すべていとしいあなたへのまごころを示すためなのです)

◆^{なじ}昔馴染みと紅花染め (紅花色)

(色がさめてもきが残る 昔馴染れ親しんだ人はいつになっても気になって忘れることができない)

◆^{ちしお}千入に染むる紅も ^{くれない}染むるによりて色を増す

(よいものでもさらに心をくばりみがきをかけてすぐれたものにすべきである)

◆霜葉は二月の花よりも^{くれない}紅なり

(霜のために変色した紅葉は二月の花よりも赤くて美しい)

◆朝紫に^{くれない}夕紅

(朝は紫色に見え夕方は紅色に見える遠い山の美しさをいったことば)

◆^{あした こうがん}朝に紅顔ありて ^{くれない}夕べに白骨となる

(人の生死のはかり知れないこと 世の無常なこと)

◆^{こうがん}紅顔の美少年

(若々しく生々とした血色の美少年)

◆花染めの移ろい易き人心

(草木染めは変色し易いことから、人の心のうつろい変わりやすいこと)

◆^{べにあじろ}紅網代

(かごかき棒が紅花の染料を塗ってある網代かご 大奥にいる御年寄が御台所の代参などで寺院などに参拝するときに乗る)

◆^{べにちやう}紅茶宇

(ポルトガル人がもたらしたインド産の薄地琥珀織の紅色の絹 袴や袴を作った)

◆来迎の柱は金箔 女の湯具は^{ゆぐ}緋縮緬

(何事も道具立てがよくないと立派に見えない)

◆緋縮緬 虎の皮より恐ろしい

(緋縮緬は商売女の腰巻に、虎の皮は鬼のふんどしに用いられたところから、商売女は鬼より恐ろしい)

山形地方の京ことば

紅花船の帰り荷として、上方の紅染衣装や雛人形などが、酒田から最上川をさかのぼって、当地方の人々の暮らしを豊かにしました。これらの品々とともに、「京ことば」も移入されました。最上川は交易の道であり、文化の道でもあったのです。

『京ことば辞典』	意 味	『山形県方言辞典』
アッチャコッチャ	あべこべ・さかさま・反対	アッチャコッチャ
アンジュ	尼僧・尼さん	アンジュ・アンジョ
イシナゴ	小石・砂利	イシナゴ・イシナンコ
インキョ	離れ座敷・分家	インキョ・エンキョ
ウルカス	水に浸して水分を吸収させる	ウルカス
オーキニ	たいそう・ありがとう	オーキニ
オシズカニ	別れるときのあいさつ	オスズガニ
オツケ	お汁	オツゲ
オバンデス	晩のあいさつ	オバンニナツタナシ
カッチャイ	裏返し・さかさま	カッチャエ・カッチャ
カタマエサガリ	着物の左右の裾が揃わぬさま	カタマエサガリ・カタメサガリ
カナ	木綿糸	カナ・カンナ
カマス	刻みタバコを入れる袋	カマス
クチベラ	唇	クチベラ・クチビラ
ゴショイモ	じゃがいも	ゴショイモ・ゴシヨイモ
ゴモクタ	ごみ・もくた	ゴンモクタ
コンニャ	今夜	コンニャ
サカイ	理由をあらわす「から」	サゲ・サゲテ・ハケ
シナコイ	柔軟な・しなやかな	シナコイ・スナコイ
シマツ	節約・儉約	シマツ・スマツ
シミル	凍る	シミル・スミル

シャル	～なさる	シャル
センド	先日・以前	センド・センドナ
ゾーヨー	雑多な費用・雑費	ゾーヨ
タズク	つかまる・しがみつく	タズグ・タグヅグ
ツッパリ	心張り棒・つかい棒	ツッパリ・ツッパリポー
ツルツル	うどん・そうめん	ツルツル・ツォロツォロ
テンコモリ	山盛り	テンコモリ
ドーブク	綿入羽織	ドーブク・ドンブク
トノグチ	家の入口	トノグツ
ナガチョロイ	細長い	ナガチョロイ・ナガペロエ
ニギニギ	握飯の幼児語	ニギニギ・ニキニキ
ネツカラ	全然・一向に・もともと	ネツカラ
ノー	終助詞「ね」	ノー
ハヤス	野菜などを細かく刻む	ハヤス
ヒボ	紐	ヒボ・シボ
ヒマダレ	ひまつぶし	ヒマダレ・シマダレ・ヒマダオレ
ヘゲル	はがれる・はがれ落ちる	ヘゲル・ヘガレル
ベチャコイ	平たい・平べったい	ペッタラコイ
ボウ	追う・追いかける	ボウ
ホーケル	惚ける・もうろくする	ホーケル・ホロケル
ホコエル	草などが成長する	ホゲル・ホキル・ホギル
ホダレ	つらら	ボーダラ・ボンダラ・ボンガラ
ホンニ	本当に	ホンニ・ホニ
ボンノクソ	盆の窪	ボンノクド・ボンヌグド
マクレル	倒れる・転げ落ちる	マクレル

参考文献 井之口有一・堀井令以知 『京ことば辞典』 東京堂出版 平4
山形県方言研究会 『山形県方言辞典』 昭45

紅花関係年表

紀元	西暦	できごと
延長5	927	『延喜式』に紅花上納の記事あるも出羽国では貢納の義務なし
天正頃	1573～	河北地方に紅花栽培拡大される(安楽寺文書)
5	1577	織田信長、名馬献上の返礼として谷地城主白鳥十郎に紅50斤を贈った
寛文12	1672	西廻り航路で羽州御城米船が酒田を出港
延宝8	1680	紅花の帰り船佐渡沖で難破、慈眼寺本尊行方不明となる(慈眼寺文書)
天和2	1682	京都の紅花問屋「稻荷講」を組織する。
3	1683	友禅染の小袖京都で流行、女性の衣服制限令出される
元禄2	1689	芭蕉「奥の細道」行脚
12	1699	紅花記事、この年より記入される(大町念仏講帳)
16	1703	大石田河岸が栄え、舟数264になる 友禅染流行
正徳元	1711	紅染下地、この頃より土産につかわれる
享保元	1716	雨不足、紅花高値 北口市公認なる 享保の改革はじまる
4	1719	大雨、大洪水、破船つづく 紅花駄不足故に高値となる 80両
7	1722	紅花京商い高値、商人利益多し 儉約令出る
10	1725	5月大洪水、紅花駄数不足400駄ぐらい
14	1729	大日照り、紅花不足、農民商人迷惑する
15	1730	『名物紅の袖』記される
18	1733	湯殿山丑年参り賑わう
20	1735	幕府が紅花問屋(稻荷講)を公認、産地直扱い禁止される
元文3	1738	紅花問屋から荷主あてに品質低下の苦情申し入れ
5	1740	柘屋甚右衛門ら代表6人が、京都所司代に対し稻荷講を訴訟するが、判決くだらず
寛保元	1741	紅粉屋へ現金直売仰付けられる
宝暦2	1752	谷地の久兵衛、儀兵衛ら「紅花売買場所」を京都に設立する運動を起こす
5	1755	紅花上作、谷地郷豊作、京着50両
明和2	1765	谷地郷より340～350駄ほど生産 大凶作庶民飢えに苦しむ
3	1766	京紅花問屋の専売崩れ、最上紅花高値となり百姓喜ぶ
安永元	1772	この頃『風流松の木枕』記される
天明8	1788	6月29日、紅花摘み船転覆、11人死亡する
9	1789	京紅花問屋、紅花売買の独占権幕府に願ひ出る
享和元	1801	古川古松軒『東遊雑記』を記す
2	1802	家具・紅染衣服・道具の贅沢禁止令出る
文化3	1806	照り勝ちにて紅花不作、上方不景気、商人弱る
5	1808	天候不順、紅花船能登沖にて破船、谷地商人損害甚大となる
		5月大洪水、紅花流され駄数不足する
		干花下落し、残花多く、最上一統迷惑する

紀元	西暦	できごと
文政 5	1822	後沢の太田幾右衛門に伏見宮より紅餅のご用命あり
7	1824	日照りつづき、紅花2度蒔付け、紅花不景気、庶民難儀する
天保元	1830	洪水にて紅花不作、畑作は虫付く
4	1833	大飢饉諸人飢える 紅花不作 紅花種の他国出荷を禁止する
7	1836	住吉大社に紅花荷主、紅花問屋によって紅花灯笼寄進される
11	1840	越後今町沖にて2船破船、山形商人被害多し
12	1841	天保の改革はじまる
13	1842	最上川航行制限解除、谷地河岸賑わう 荒町村大火 紅商人によって神明宮再建される
嘉永 6	1853	本木林兵衛・播州姫路の商人達、下槇白山神社に石籠を建立する 紅花資料館の武者蔵を建立する
安政元	1854	紅花資料館の座敷蔵の襖絵描かれる
2	1855	8月若狭沖にて紅花船破船、谷地・山形商人被害受ける
3	1856	紅商人によって定林寺に五百羅漢寄進される
6	1859	安政の開国条約結ばれ、外国産紅輸入される
文久 3	1863	紅花旱損により不作 紅花摘日記書きはじめる 紅花資料館の御朱印蔵 建立する
元治元	1864	紅花並作 京都大火につき、花高値となる
慶応 2	1866	谷地大火 大洪水、紅花流される 沢畑刀作り盛んになる
明治 8	1875	大洪水、最上川通り紅花流され百姓弱る 新桑植栽はじまる
10	1877	「第1回国内勸業博覧会」に紅花を県として出品する
14	1881	この年より紅花相場の記録なし
22	1899	皇太神宮遷宮式に先代岩淵栄治が紅餅を納入する
41	1908	皇太神宮遷宮式に高島屋を経て岩淵店にご用命があり紅餅を納入する
大正 5	1916	新紅花摘み唄流行する
9	1920	明治神宮遷宮式に岩淵店が紅餅を納入する
昭和 3	1928	天皇御即位式に高田装束店を経て出羽村農会が紅餅を納入する
4	1929	皇太神宮遷宮式に高田装束店が紅餅を納入する
28	1943	皇太神宮遷宮式にご料の足しに（紅花を）納入する
40	1965	山形県紅花生産組合連合会が設立される
55	1980	『べに花の里・かほく』を標榜する
59	1984	紅花資料館開館する
61	1986	紅の館完成する